



カキ殻を使った作品。白く白濁したその模様は、カキのむき身を思わせる色合いに仕上がります。

カキ殻を使って陶器製作

作品にこめる 江田島への 想い

沖山さんが2年前から製作している、カキ殻を使った陶器。島ならではの作品を作ってみたらと助言され、試行錯誤の末に完成しました。カキ殻はそのまま使うのではなく、焼いて灰にしてから釉薬（器の表面にかける薬品）として使います。土の種類にもよりますが、カキ殻を使うと白く白濁した兎目（兎の毛のような細かい線状の模様）ができる

のが特徴です。

沖山 努さん（江田島町宮ノ原）

切串小学校、切串中学校、広島県立舟入高校を経て京都芸術短期大学へ。その後二代目勝尾青龍洞に師事し、陶芸を修行。帰郷後、平成3年に江田島町宮ノ原で開窯。

この作品の根底にあるのは、生まれ育った江田島への想い。「私が住んでいる所は地理的に不便なところかもしれないが、ここから離れて別の場所に住む気はまったくありません。それは、この島にある海や山などの自然が大好きだから。私は江田島大好き人間ですね。釉薬にカキ殻を使うのも、そうすることで江田島をPRしたり、まちおこしのきっかけになったりすればと思ったからです」と沖山さん。江田島市外への出張販売や市外からの来客の際は、必ず江田島のことを話すそうです。「もっとみんなに江田島を知ってもらいたい。何回でも来てもらいたいし、住んでみてほしいと思っています。そのためには、私自身がもっと深く江田島のことを知らなくてはいけないので、機会があればいろいろな人から話を聞いています。江田島市を活気あふれるまちにするために、自分にできることを少しずつしていきたいですね」と話していました。

ほっぴんひいき

新年明けましておめでとうございます。今年も「広報えたじま」をよろしくお願いいたします。

正月の楽しみの一つは、こたつに入ってみかんを食べながら、友人や恩師からの年賀状を読むこと。最近では、パソコンなどで凝ったものを簡単に作れるようになりました。それにかまけて、私はプリンタで印刷だけ行い、直筆では何も書かずに送ることもしばしばです。

しかし、ある雑誌を読んでいると「…年賀状は、見栄えのいいものを簡単に作れるようになった。しかし、そこに『心』はあるだろうか？…」と耳の痛い文章が。何のために年賀状を出すのだろうか？何も考えず、ただ送るだけになっていたのでと反省したところで、広報でも同じだとはっとしました。なんのために広報紙を発行するのか？掲載している文章に、伝えたいという「心」は込められているだろうか。まだまだ力不足だけれど、気を引き締めて頑張ろうと思います。